

Wang 変換による保険料算出原理と Hermite 多項式

近藤宏樹¹ 斎藤新悟²

¹ 日新火災海上保険株式会社

² 九州大学マス・フォア・インダストリ研究所

2012/11/10

谷口説男氏（九州大学大学院数理学研究院）との共同研究.

保険料算出原理：将来の保険金に対して保険料を対応させる規則。
将来の保険金は確率変数で表されるので、数学的には

定義

保険料算出原理とは、確率変数の集合 \mathcal{X} から \mathbb{R} への写像 $\pi: \mathcal{X} \rightarrow \mathbb{R}$.

例

- **期待値原理**： $\pi(X) = E[X]$.
- **標準偏差原理**： $\pi(X) = E[X] + h\sigma(X)$ ($h > 0$).

リスクプレミアム $= \pi(X) - E[X]$ ：保険金の不確実性の対価.

確率変数 X の分布関数を F_X と書く : $F_X(x) = P(X \leq x)$ ($x \in \mathbb{R}$).

定義

h : 0 以上の定数.

確率変数 X の **Wang 変換** $W_{X,h}$ とは

$$F_{W_{X,h}}(x) = \Phi(\Phi^{-1}(F_X(x)) - h) \quad (x \in \mathbb{R})$$

なる確率変数 (Φ : 標準正規分布の分布関数).

これを用いた保険料算出原理を次で定める :

$$\pi(X, h) = E[W_{X,h}].$$

$\pi(X, h)$ は次で計算できる :

$$\pi(X, h) = \int_0^{\infty} (1 - F_{W_{X,h}}(x)) dx - \int_{-\infty}^0 F_{W_{X,h}}(x) dx.$$

- **正規分布** : $X \sim N(\mu, \sigma^2)$ のとき

$$W_{X,h} \sim N(\mu + h\sigma, \sigma^2), \quad \pi(X, h) = \mu + h\sigma.$$

- **対数正規分布** : $X \sim LN(\mu, \sigma^2)$ (つまり $\log X \sim N(\mu, \sigma^2)$) のとき

$$W_{X,h} \sim LN(\mu + h\sigma, \sigma^2), \quad \pi(X, h) = \exp\left(\mu + h\sigma + \frac{\sigma^2}{2}\right).$$

- **一様分布** : $X \sim U(a, b)$ のとき

$$\pi(X, h) = a + (b - a)\Phi\left(\frac{h}{\sqrt{2}}\right).$$

命題

$h \geq 0$ を固定したとき、 $\pi(X) = \pi(X, h)$ は次を満たす：

- 定数 c に対して $\pi(c) = c$.
- π は **リスク尺度**：
 - **単調性**： $X \leq Y$ ならば $\pi(X) \leq \pi(Y)$.
 - **平行移動不変性**： 定数 c に対して $\pi(X + c) = \pi(X) + c$.
- π は **コヒーレント** である：
 - **正の同次性**： 定数 $c \geq 0$ に対して $\pi(cX) = c\pi(X)$.
 - **凸性**： 定数 $\lambda \in [0, 1]$ に対して
$$\pi((1 - \lambda)X + \lambda Y) \leq (1 - \lambda)\pi(X) + \lambda\pi(Y).$$
 - **劣加法性**： $\pi(X + Y) \leq \pi(X) + \pi(Y)$.

さらに、 $\pi(X, h)$ は h について単調増加で $\pi(X, 0) = E[X]$.
よって $\pi(X, h) \geq E[X]$ (**リスクプレミアムは非負**).

x_1, \dots, x_n ($x_1 \leq \dots \leq x_n$): 保険金の過去データ.
この経験分布を X の分布と考えると,

命題

$$\pi(X, h) = \sum_{i=1}^n x_i \left(\Phi \left(\Phi^{-1} \left(\frac{i}{n} \right) - h \right) - \Phi \left(\Phi^{-1} \left(\frac{i-1}{n} \right) - h \right) \right).$$

関数"wang"の定義

```
wang = function(x,h){  
  n = length(x)  
  phi = outer(0:n,h,function(i,k){pnorm(qnorm(i/n)-k)})  
  return(as.vector(sort(x) %*% diff(phi)))  
}
```

使用例

```
x=c(2,4,6,0,0,3,2,0,5)
```

```
wang(x,h=c(0,1,2)) # h=0, 1, 2の結果が出力される
```

- 契約件数：100,000 件.
- 事故頻度：1%（事故件数：1,000 件）.
- 保険金：対数正規分布 $LN(10, 4)$.
- データ全体では平均 1,542，標準偏差 69,096.

h	0	0.001	0.005	0.01	0.02
保険料	1,542	1,547	1,569	1,597	1,654
リスクプレミアム	0%	0.4%	1.8%	3.6%	7.2%
h	0.05	0.1	0.2	0.5	1
保険料	1,836	2,181	3,063	8,131	36,003
リスクプレミアム	19%	41%	99%	427%	2235%

h は 0 に近い値を適用することが現実的.

→ $\pi(X, h)$ の $h = 0$ 付近での振る舞いを調べる.

→ $\pi(X, h)$ を **Maclaurin 展開**.

$\pi(X, h)$ の Maclaurin 展開には **Hermite 多項式** が現れる。

定義

整数 $n \geq 0$ に対して **Hermite 多項式** $H_n(z)$ を次で定義：

$$H_n(z) = (-1)^n e^{\frac{z^2}{2}} \frac{d^n}{dz^n} e^{-\frac{z^2}{2}}.$$

例

$$H_0(z) = 1, H_1(z) = z, H_2(z) = z^2 - 1.$$

$\{H_n(z)\}_{n \geq 0}$ は \mathbb{R} 上の $\varphi(z) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{z^2}{2}}$ を重みとする **完全直交関数系**：

$$\int_{-\infty}^{\infty} H_m(z) H_n(z) \varphi(z) dz = \begin{cases} n! & (m = n), \\ 0 & (m \neq n). \end{cases}$$

定理

$g = F_X^{-1} \circ \Phi$ とおき,

$$a_n = \int_{-\infty}^{\infty} g(z) H_n(z) \varphi(z) dz \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

とおくと,

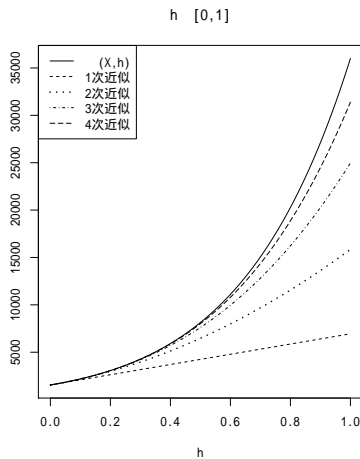
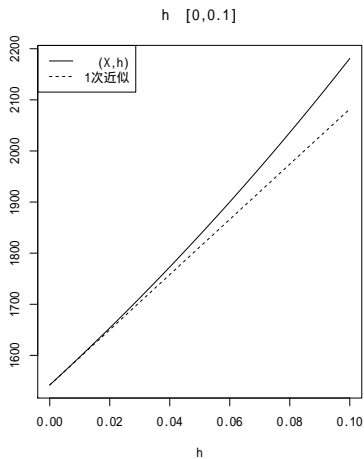
$$\pi(X, h) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{a_n}{n!} h^n.$$

$Z \sim N(0, 1)$ ならば $g(Z)$ は X と同分布.

$a_n = E[g(Z)H_n(Z)] = E[XH_n(Z)]$ (X と Z は**共単調**).

- $a_0 = E[X]$.
- $a_1 = E[XZ] = \text{Cov}(X, Z)$ より $0 \leq a_1 \leq \sigma(X)$
($E[Z] = 0, V(Z) = 1$).

(X, h) の多項式近似



- Wang 変換による保険料 $\pi(X, h)$ は **Hermite 多項式** を用いて **Maclaurin 展開** できる.
→ h が 0 に近いときは $\pi(X, h)$ を **多項式で近似** できる.
- $\pi(X, h)$ は h の値によって大きく変化 (0 に近い値が適当).
→ 実務上は **h の設定方法** が課題.
→ 多項式近似は h の調整に役立つと考えられる.